

初級文型運用能力テストの試み

—初級文型の使用状況と日本語習得段階との関連—

三井 豊子

要 旨

初級文型運用能力を測る目的で、短い会話文に動詞の活用形を記入するテストを行い、初級文型の使用状況と日本語習得段階との関連を探った。高得点グループにおいては記入された文型の形に収束傾向が見られるのに対し、得点の低いグループにおいては解答が多岐にわたっており、使用状況はまちまちであった。また、学習者にとっての問題文の難易とその要因もおおよそ確かめられた。解答に現れた正用・誤用を中間言語の視点から分析したところ、得点の高低によって誤用形態に異なる傾向が見られ、高得点グループでは日本語母語話者の使用に近いと思われる語形が使用されるなど、中程度以下のグループとの違いが顕著であった。

【キーワード】 初級文型 習得段階 文構造 モニター 中間言語

Designing a Test of Ability of Using Elementary Sentence Patterns :

the relation between use of elementary sentence patterns and acquisitional stage

Mitsui, Toyoko

The objective of this study is to examine learners' ability of using elementary Japanese sentence patterns in order to find out the relation between the usage of the sentence patterns in the test and the learner's stage of acquisition, by asking them to write verbal endings in short conversations. It was found out that high scorers tended to use the same form of verbs, whereas there was a variety of answers among low scorers. The most greatest difference in the use of patterns was that the learners in the high scoring group tended to use forms used by native Japanese, which is not seen among the learners in the groups scoring below average.

1. はじめに

既習者は理解や表現上、不可欠な初級文型の知識をどの程度・どのように習得しているのか。文脈や使用語句などから特定の文型が類推できるのか。日本語コース開始期にこれらが具体的に把握できると、学習者の個人情報として、また後の変化を知るための手掛かりとして役に立つ。そこで初級の中心的学習項目である文型知識の有無の程度とその使用状況をみるための簡単なテストを試みた。学習者は、会話文の中の空白に指定された動詞を適当な形にして書き込む。既習者には難しくはないが、正確さが要求される。選択肢から選ぶ場合とは異なり、記入できずに空白が残ったり、また記憶を頼りに、似てはいるが異なる語形が書かれる場合もある。ここには学習者の使用の実態が習得過程の一端として表われるのではないだろうか。

これは総合的な文法力を測るためのものではなく、初級文型の運用能力についてのみ測り、文型の使用状況を具体的に把握しようとするものであるが、総合的な日本語能力に比べて初級文型の知識や運用力が極端に欠けるとされる学習者を識別したり、文法の下位テストとして必要に応じて補助的に使用したりできるのではないかと考えた。

このテストは、初級を終えていても熟達度の低い学習者には多少難易度が高くなるが、中上級学習者にとっては簡単なテストであり、満点が続出することも考えられる。しかし、たとえ満点でも、学習者が産出した言語資料には習得過程が表われているはずであり、以下のような疑問点を解明する手掛かりが得られるのではないと思われる。(1)既習者は問題文の文脈や語句から同一の文型を類推するのか。(2)空白に入れる文型の一部として、どのような語形を想起するか。(3)産出された語形は、どの程度正確で、文脈での適切さはどうか。(4)表記は正確か。(5)習得レベルにより、特徴的傾向が見られるか。

本稿では、学習者が記入した語形の正用・誤用を含めて、文脈への適切さという観点からその使用状況を分析し、さらにプレースメントテストと同時に実施されたことから、プレースメントテストにおける文法テストの下位テストとしての可能性について述べる。

2. テストの概要

2. 1 作成方針

初級文型に焦点をあて、初級前半から後半まで30の文型(全32問)を取り上げた(表1)。このテストでは文型の使用状況を個人レベルで具体的に見るために、文字による直接記入の方法を取ったが、採点の手間を省くため、記入箇所は最小部分に限った。

表1

1.ーてから	2.ーている	3.ーてください	4.ーことがある	5.(あまり)ーせん	
6.ーたい	7.ーながら	8/9.ーたりーたり	10.ーことができる	11.ーまえに	
12.ーておく	13.ーほうがいい	14.可能形	15.ーことにする	16.ーことがある	
17.ーばならない	18.ーとき	19.おーになる	20.ーうとしたところ	21.ーば	
22.もう～	23.ーてしまう	24.伝聞	25.ーてくださる	26.ーてみる	27.使役
28.ーみる(ように)	29.まだーせん	30.ーと	31.受身	32.受身	

問題文(資料1)はA B二人の対話からなる会話文とし、全問題文に統一話題として「新聞・読む」を含めた⁴⁾。これは、各会話文のなかの語句・文法・文脈などから特定の文型が類推できるかどうかを試すことが中心課題だが、会話文に含まれる要素、とくに語彙が問題文ごとに異なると、学習者によっては課題解決の際の負担を大きくする。場面変換を少なくしたのはそれを避け、注意を文型の再生に集中できるようにするためである。使用語彙は初級の基本的なものに限った。また、話題の統一・語彙の制限はあるが、対象者は初級後半から上級までの学習者群であり、運用能力は習得段階によって相当異なることから、難易度に幅を持たせることも必要である。そのために単に文法的な複雑さを加えるだけでなく、特定の日常場面を会話文に含めるなどしたものもある。

例外として2種類の文型だけは2度使用し、それらについては文法的文脈的な変化が学習者の解答に変化を与えるかどうかを見ようとした。

2. 2 問題文の特徴

学習者は会話文を読み、空白部分に動詞「よむ」を適当な形にして書き込む(例1)が、32問すべて書き込む動詞は1種類であり、「よむ」の変化した形を書けばよい。語彙は、固有名詞を除いて、ほとんどの初級教科書にある基本的なものである。文脈に関しては日本人の日常生活に見られる社会慣習的な場面を含めた会話もいくつかある(例2)。だが、言語的知識だけで答えられる問題になっており、解答の正否に迷うような場合にのみ体験に基づいた日常場面の知識が助けとなることも考えられるという程度である。

例1) A「山田さん、いらっしゃいますか。」

B「山田さんなら、今あそこで新聞を()いますよ。」(問2)

例2) A「いつも電車の中で新聞をよみますか。」

B「いいえ。わたしは新聞を()から、うちを出るんです。」(問1)

問題文の中に解答となる文型の語形そのものを出さないようにするために、テスト問題の中の会話は外国人場面(外国人学習者と日本語母語話者による会話場面)として設定した。学習者の発話文には、基本的には敬体を使用し、多少不自然さも感じられる教科書的な日本語を使用している。上記、例2の場合、話者Aの文末部分「よみますか」は、学習者の中間言語としては認められるものの、母語話者の日本語としては不自然さが直感されるのではないだろうか。ただし、学習者の発話か母語話者の発話かを明記する必要はないと判断した。AとBがそれぞれ母語話者か学習者かということも統一していない。

会話形式は解答に制約を与える場合もある。例3では、「～よんだから」「～よんでから」の両方が正答と認められるが、意味は異なり、学習者がどちらの意味を表現しようとしたのか、その意図が判断できない。また、前者の場合、この一文だけではどんな状況でこのような発話が生産されるのかを特定しにくい。後者の場合は、この一文内に、慣習的な日常生活行動が表現される。これを会話形式(例2)にすると、Aの問いかけに対するBの応答内容の適否が明確となり、文型が特定される。

例3) 「わたしは新聞を()から、うちを出るんです。」(例2の一部)

2. 3 対象学習者

対象者は筑波大学留学生センター補講コースに入る学生142名(既習者)である。テストは1995年春のプレースメントテスト(以下、P Tとする)とともに実施された。このP Tは文法・聴解・読解・漢字語彙の4部門から構成され、所要時間は120分である。文法問題は前半と後半に分かれ、それぞれマークシート30問と記述式6問からなる。文法問題前半では初級から中級前半程度の問題を、文法問題後半では中級から上級にかけての問題を扱っている²⁾。この初級文型運用能力テストはP T文法問題前半との相関が高く、0.84であった。

3. 結果分析

3. 1 全体的傾向

得点は0点から32点まで幅広く散らばる(図1)が、26・27・28点にだけ十数人ずつ、計38人が集中した。さらに24点(75%)から32点(100%)までの得点者を含めると、合計80人(56%)となり、半数以上の受験者が75%以上の得点であった。テストの採点基準としては、正確な表記(清濁の違いは認めない)、活用形の自然さ(「よまないです」は認めない)、文末は文体に合わせて敬体を使用する、文脈に合い、より自然だと思われる表現(アスペクトなど)を用いることなどを求めた。もし意味が通じ、決定的な間違いとは言いがたいような表現の使用も認め、許容の範囲を広げれば正答率は上昇する。しかし、このテストの目的の一つとして習得過程の観察を含めており、とくに上級学習者と中級学習者との差異について、経験的には察知できるが、具体的に指摘しにくい点が明らかにできないかという期待があった。本稿では、習得の進んだ段階にある学習者の言語使用の実態を捉えようとする目的により、許容範囲を広げず、正答率と記入された語形に焦点を合わせて全体的な傾向を探る。

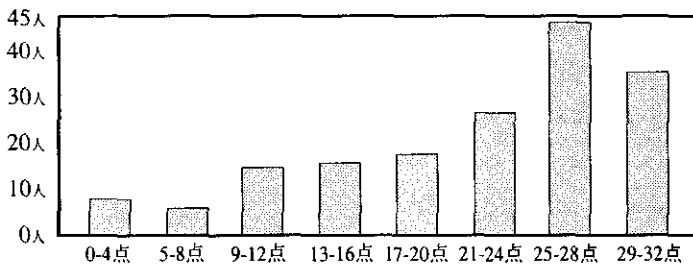


図1 得点者数

表2

	75%以上の得点者		75~50%	50%以下
	A(高得点群)	B(中高得点群)	C(中得点群)	D(低得点群)
得点数	32~28	27~24	23~17	16~0
人数	39名	41名	31名	31名

表3 正答率が高い項目 * A B Cが高い。Dも他の文型より高い。

問 題	A	B	C	D
No.2 ている	100 %	100 %	90.3%	51.6%
No.3 てください	100 %	97.5%	73.4%	48.3%
No.4 ことがある	100 %	100 %	90.3%	67.7%
No.6 ~たい	100 %	100 %	90.3%	54.8%
No.7 ながら	100 %	97.5%	87.0%	29.0%
No.8/9 たりたり	100 %	92.6%	100 %	54.8%
No.10 できる	94.8%	100 %	93.5%	61.2%
No.11 まえに	97.4%	97.5%	93.5%	38.7%
No.13 方がいい	100 %	97.5%	87.0%	45.1%
No.15 ことにする	100 %	100 %	90.3%	38.7%
No.18 とき	100 %	100 %	100 %	61.2%
No.21 ~ば	97.4%	90.2%	90.3%	38.7%
No.25 授受	97.4%	90.2%	83.3%	45.1%

表4 正答率が低い項目 * 全体的に低い。Aも他の文型より低い。

No.20 意向形	84.6%	21.9%	3.2%	0 %
No.27 使役	87.1%	31.7%	16.1%	0 %
No.29 まだ~せん	71.7%	41.4%	16.1%	12.9%
No.31 受身	69.2%	29.2%	6.4%	0 %
No.32 受身「よまれている」 (「よまれる」を認めた場合)	33.3% (76.9%)	9.7% (53.6%)	0 % (32.2%)	0 % (0)

表5 正答率の差が大きい項目 * B C間に差がある。(No.26以下はC D間)

No.1 てから	89 %	51.2%	12.9%	9.6%
No.12 ておく	97.4%	95.1%	58.0%	9.6%
No.14 可能形	97.4%	85.3%	35.4%	9.6%
No.16 ことがある	97.4%	85.3%	61.2%	12.9%
No.17 なければならない	97.4%	73.1%	22.5%	3.2%
No.19 おーになる	100 %	92.6%	61.2%	35.4%
No.23 てしまった	100 %	90.2%	61.2%	6.4%
No.26 てみる	97.4%	95.1%	80.6%	19.3%
No.28 てみるように	100 %	85.3%	70.9%	9.6%
No.30 ~と	100 %	95.1%	80.6%	25.8%

表6 正答率の差があまり大きくない項目 * Aが低めだがDは低くない。

No.5 あまり~ない	87.1%	70.3%	67.7%	29.0%
No.22 もう~ました	89.7%	82.9%	51.6%	38.7%
No.24 ~そう(伝聞)	84.6%	63.4%	48.3%	32.2%

表2は得点別正答者数に基づいたグループ分けで、正答率が75%以上の高得点群をAとB、正答率が75%～50%をC、正答率が50%以下の低得点群をDとする。Dの学習者数は全受験者の22%で、誤用の多さと語形が多種類にわたっていることに加え、解答欄の未記入数もこのグループに圧倒的に多く、これは他のグループと最も違う点である。初級文型を終えていないか、初級を学んだとしても、その知識を適切に使える段階にまで習得が進んでいない学習者がほとんどを占めると思われる。

表3・4・5・6は文型ごとのグループ別正答率で、正答率の程度から文型に関する運用力の傾向を捉えようと分類したものである。問題番号(1～32)は、問題文中の文型の順番を示す。提出順は初級教科書における一般的な順になるべく沿うようにした。前半の問題ではABCともに満点か、それに近い点数が多く、Dでも比較的正答率が高いことが分かる。後半の問題では、とくにCに得点の低い項目が増えている。

Aでは問29・問31・問32だけが正答率70%前後だが、ほとんどの項目は90%に近いか、それ以上である。正答率が70%に達しない項目がBに8項目あるのと比較して、Aでは初級項目が確実に習得されている様子が伺われる。Bは、Aとほとんど差のない学習者も含まれるが、グループとしては差異の著しい項目もある。ことに、意向形・使役形・受身形はAとの差が大きい。

Cになると15項目で正答率が70%を下まわる。とくにA・Bと異なる点は、形が覚えられていないもの、状況に合った適切な使用ができていないものが多く見られることである。可能形・伝聞・「一なければならぬ」などは前者の例であり、受身形・使役形・「一てから」などは文脈の解釈が正確にできないと会話内容が成立しないことになり、これらは後者の例と言える。アスペクトの項目でA・Bより正答率が低い原因は、言語知識が不足しているためか、テ形が不安定なのか、判断は難しいが、問12「一ておく」・問13「一てしまう」におけるテ形正答率が、問26「一てみる」より約20%低く、問2「一ている」と比べると、30%前後低い。テ形そのものよりも、アスペクトに難がある段階ではないかと思われる。

対照的に、Aにはアスペクトをより多く使う傾向が見られる。問24「伝聞」では、辞書形も正答だが、「よんでいる」の使用が9例、問29でも「よんでいません」が24例あり、いずれもBの2倍となっている。Cは1例が見られるのみである。問32でも「よまれている」が13例あり、自然な表現ができる段階に達していることを示している。

Dの誤用で目立つのは、音声的に近い他の語形が使われた誤用例が多いことである(資料2)。問7「一ながら」では、正答「よみ」が9例に対し、誤答「よむ」12例、「よん/よめ/よま」5例となっている。問8・9「一たり」にも同様の傾向が見られる。文型の形が定着していないうえに、音声的にも耳が訓練されていない状態にあることが、その原因であろう。このタイプの誤用がDにだけ極端に多いということは、この現象が初級あるいは中級前期に特徴的なもので、音声識別能力とも関係しているのではないかと推測される。

3. 2 正答率の高い項目

初級前半で提出される文型が多く、A・B・Cの正答率はおおよそ90%を超えている。Dの正答率も50%前後の項目が多い。問3では、Cの正答率が73.4%と低めだが、誤用に「買って」「貸して」など、他語

の使用が6例あることから、これは問題のやり方の要領がつかめていなかったのであろう。Dの解答には、指定動詞以外の他語の出現頻度が高く、特徴的な現象である(例外 問31「受身」)。

問4「ことがある」では、辞書形のほかにタ形も多かったため(A8例、B8例、C6例、D2例)、2種類を正答としたが、これは文脈の甘さが起因となって正答が複数出た例であった。問題文の修正が必要である。問13「ほうがいい」の場合も、タ形・辞書形の両方が使われており、いずれも正答とした。この文型は、タ形を使って教える初級教科書が多いと思われるが、正答の中で辞書形の使用率が低得点群ほど多いことに注目した(表7)。

表7

	A	B	C	D
よんだほうがいい	33(85%)	29(72.5%)	11(41%)	2(14%)
よむほうがいい	6(15%)	11(27.5%)	16(59%)	12(86%)

問21(例4)はDを除いて正答率が高い。「一ば」には後件の制約があるものもあり、学習者自身が文を生成する場合には習得が容易とは言えない文型であるが、ここでは活用形だけを求めた問題となっている。

例4) A「じしんで、何人ぐらい死にましたか。」

B「さあ...新聞を()ば、わかると思いますけど。」(問21)

問7「ながら」は、Dの正答率だけが例外的に低い。誤用の傾向については3-1で述べた。

3. 3 正答率の低い項目

「意向形」「使役」「受身」「まだ～ません」(表4)は、B・C・Dの正答率が低い。問20の意向形は、形そのものの習得に時間がかかることが経験的に知られているが、Aに比べてB・Cの正答率が非常に低い。意向形のあとに説明のムードが続くなど、構文上の複雑さも正答率を低めた要因であろう。しかし、Aはどちらの要因にも影響されず、ほぼ習得できていると言えよう。意向形の誤用には「よむ」が多い。誤用「よむ」の使用率は、A15.3%(6例)、B53.6%(22例)、C54.8%(17例)、D32.2%(10例)であった。とくにB・Cにおいては、半数以上の学習者が意向形の代わりに辞書形を使っており、習得の遅れる傾向が確認された。Dには無記入(11例35%)が目立つ。

問27(例5)では、「よむ」と記入した学習者が多い。それを認めれば、A7例(17%)、B22例(56.4%)、C18例(60%)、D9例(29%)が正答となり、正答率が大幅に上がってA100%、B87.1%、C76.6%、D29%となる。しかし、使用の実態を知るという観点から、使役形と「よんであげる/やる」のみを正答として扱った。Aの学習者82%が使役形を記入したということは、文中の「に」と使役形との関連性がAには認識されており、A以外の学習者は文脈や助詞から使役形を類推することが非常に困難であったと判断できよ

う。この会話で「ーてあげる/やる」を使うと、読み手がかわるが、表現は適切であり、自然な文なので正答に含めた。A2例、B3例、C2例であった。

例5) A「毎日、英語の新聞を買いますか。」

B「いえ、ときどきです。英語を教えているので、高校生に英語の新聞を()ために買っています。」 (問27)

受身形は正答率が最も低い。問31(例6)でAの誤用を見ると、受身形の異形は2例だけで、他の誤用として使役形4、使役受身2、辞書形・可能形が1例ずつあり、これらの学習者には文脈が全く理解できなかったことが推測される。Aの学習者30%は、主語・目的語の省略、3つの節から成る複文、受身という3要素が含まれた文の構造が読み取れなかったことになる。

さらに「迷惑」「邪魔」といった意味的には文脈に合うが、指定から外れたことばの使用がAにも見られた唯一の項目である。Aに2例、Bに6例、Cに6例、Dに2例であった。数は少ないが、各グループに共通して出現しており、また、Dには他の文型でも見られ、出現頻度が高いことから考えると、文型の語形が想起できないというより、状況が理解しにくい文脈では、文法知識を適用して処理をせずに、習得されている類義語を用いて意味的に処理しようとする傾向があるのであろう。

Bでも、この会話文は、だれがどんな行動をしている場面なのかが見えられていないことが分かる。Cでは、正答・誤用を含めても受身文を作ったのは3人だけで、10%にも満たない。

例6) A「電車の中で新聞を読みますか。」

B「いいえ。電車の中で新聞を()と、となりの人に(問31)から、いやなんです。」

問32(例7)では、「よまれている」と書いた学習者がAに13人、Bに4人おり、アスペクトの使い分けができていた。表4には、正答に「よまれる」を含めない場合と含めた場合の正答率を記入した。感覚的には受身文に関連づけた学習者が、問31よりは多く、受身文としての難易度は問31の方が高いと言えそうだ。しかし、問32に見られる誤用例には、使役形・使役受身・辞書形・ている・意向形が目立ち、可能形・授受・推量などまで多岐にわたり、D以外の学習者にとっても文脈理解が困難な様子が伺える。

例7) A「会社員は、たいてい日本経済新聞をよみますね。」

B「そうですね。でも、朝日新聞や毎日新聞のほうがたくさんの人に()と思いますよ。」

問29は、記入箇所が文末の述語動詞であったために、解釈によってはいろいろな表現が可能となり、結果として5種類の正答を認めたが、判定基準は許容度によって変更可能であり、問題文の修正が必要である。

3. 4 正答率の差が大きい項目

問1(例2)では、Bの正答率が低い。原因の一つは、「ーてから」「ーたから」の混用(資料2)で、他の原因は、会話文中の発話者Bの「いいえ」に引きずられて、否定形を用いたことが考えられる。このタイプの誤用がBに7例みられた(資料2)。一文理解は難しくなくても、談話レベルでは難しくなるようだ。正確に解釈できることが必要となる。この否定形を使った誤用が、Cに8例、Dに11例見られた。問30「ーと」

の誤用にも、問1と同様の現象と思われる否定形の使用がB・C・Dに数例ずつ見られる。Aにはなかった。

テ形とタ形の混用、「いいえ」との不必要な関連づけ、語形が不安定で定着していないこと、他語による処理方法など、低得点群ほどさまざまな誤用の要因が見られる。問16の場合も、前件に過去であることが述語動詞によって明示されているにもかかわらず、現在形「よむ」の使用が多く、文中の言語要素が正確に認識されないことが伺える。

問26・28(例9、例10)を比較すると、同じ文型であるにもかかわらず、B・C・Dでは問28の正答率が、問26より10%低い。問題文の()に続く補助動詞「みる」が、マス形・普通形という違いがあること、また、文末が一方は補助動詞1つ、他方は引用句の提示が長い表現でなされているという違いがある。文型が認識できれば容易なはずであるが、問28の文末に含まれるいくつかの要素が学習者の文型認識に変化を生じさせたことになろう。また、表8に誤用例を示したが、ここで特徴的と思われる現象は、問28における「よ」の記入が、Cでは減少しているが、Dでは変化が少ないことである。これが習得レベルによる認知の違いを示すものかどうか、これだけでは何とも言えないが、文中から動詞の部分を知ることができる学習者なら、「よみる」が不自然な文字連続だと弁別できるのではないだろうか。

例8) A「この新聞はむずかしいと思いますけど、わかるかどうか()みます。」(問26)

例9) A「先生が、日本の新聞を()みるようにとおっしゃいました。」(問28)

表 8

	B	C	D
問26	よ1、使役受身1	よ5、未記入1	よ7、未記入9、よんて5、その他4
問28	よ1、受身3、使役1、その他1	よ1、その他5、未記入3	よ6、未記入16、使役1、その他5

可能形(問14)と「一ばならない」(問17)は、CとDの正答率が非常に低いが、誤用例を見ると、形が覚えられていないことが原因のようである。とくに、Dの記入部分が短く、また、無記入が多いことから、「一なければならぬ」という長い複雑な音連続に慣れていないことが推測される。初級学習者に特徴的な傾向と思われる。

3. 5 差が大きくない項目

問5(例10)は、記入部分が文末の動詞だったために自由度があり、問29で正答が5種類出たのと同じく、問5でも正答を6種類認めた。話ことばにおける音声的な省略現象も加わり、正誤の判定、採点上の手間がかかることなど問題点が明らかになった。

例10) A「日本の英語の新聞は高いから、このごろはあまり()。」

問22(例11)は、文法的にも文脈上からも正答はタ形のみになるので、上記のような問題はない。A2例、B4例が普通体を使用したがる、これは会話の文体を認識して適切なスタイルを使う、ということがな

されていないことになる。C・Dでは、現在形がそれぞれ8例・5例使われており、習得の低い段階では文の理解に問題があるようであり、A・Bとは誤用の性質が異なる。低得点グループには、文法知識を使って文を正確に解釈していないケースが多く、さまざまな誤用の起因となっている。

例11) A「この新聞は、もう(問22)か。」

B「ええ。もう()しまいましたから、あげますよ。」

問24「伝聞」については、BとCのそれぞれ30%あまりの学習者が「よみ」と記入しており、経験的に知られている状態との混用しやすい傾向が確認された。ここでもAには「よんでいる」と記入されたものが9例あることに注目した。問5では「よんでいません」8例、「よまないですね」「よまないんです」など3例の使用があり、Aの学習者は話ことばとの接触が多いことも推察される。問29と問32での使用状況については3-1で触れた。

以上、正用・誤用を通して初級文型の使用状況について具体的に述べた。全体的な傾向を整理すると、資料2で明らかのように、Aの誤用の種類はB・C・Dに比べて非常に少ない。問題文として修正の必要な問5と問29を除くと、Aに2種類以上の誤用が出現しているのは、問10・22・24・31・32だけであった。問題文に含まれる文法的な要素を的確に捉え、談話レベルの解釈も正確にでき、文脈に対してより適切な文型と形が産出できると言えよう。正用についても、「ーている」の使用にB・Cとの差異が著しいなど、その日本語能力がより自然な描写ができる段階にあることを伺わせる。話ことばとの接触がある様子などからも、本テストの文脈で見る限り、その中間言語が母語話者の使用する日本語にいつそう近づいていることが推測される。

Bにおいて、2種類以上の誤用が出現した問題は16問に及び、Aほどの収束傾向が見られない。さらにCにおいては、一般的に初級教科書の前半で提出され、習得が容易な文型については正答率が高く、習得がなされている項目も見られるが、形が覚えにくいもの、似ているもの、アスペクトなど、初級では難しいとされる使役・受身以外の項目にも困難な点が多かった。またCに見られる誤用の傾向から、談話内の文法的要素が認識できていなかったり構造がおさえられないために、文脈の解釈が不正確となり、モニターして誤用を自己修正することができないという傾向が顕著であった。

4. 識別度

次にプレースメントテスト(P T)として使用するには、識別度が重要であり、それを確かめるために、前記の初級文型テストの上位得点者40名(28%)と下位得点者40名(28%)の正答率と識別度を以下の図1に表した。表9には識別度の程度により問題文を分類した。

識別度が0.3を下まわるのは問18だけであり、この点だけから言えば識別度は高いことになる。

しかし、表9の識別度と表3・4・5・6の正答率を合わせてみると、識別度は高いが正答率が低すぎる項目、正答率が高いが識別度が低い項目のあることが分かる。問題文が不適当なことをすでに指摘した問5と問29を除外しても、ほかにも文脈の制約が甘かったために、正答を2種認めざるをえなかった問3・4・25・27など、修正が必要な問題文もあるが、さらに識別度・正答率からだけ考えると、以下の問題文

表9 識別度の程度による分類

識別度0.3以下	識別度0.4～0.7		識別度0.7以上
No.18 ーとき	No.3 ーてください	No.25 ーてくださる	No.1 ーてから
識別度0.3～0.4	No.7 ーながら	No.26 ーてみる	No.12 ーておく
No.2 ーている	No.11 ーまえに	No.29 まだーない	No.14 可能形
No.4 ーことがある	No.13 ーほうがいい	No.30 ーと	No.16 たことがある
No.5 あまり～ない	No.15 ーことにする	No.31 受身	No.17 ーばならない
No.6 ーたい	No.19 おーになる		No.20 ーうとする
No.8/9 ーたりーたり	No.21 ーば		No.23 ーてしまう
No.10 ことができる	No.22 もうーましたか		No.27 使役
No.32 受身	No.24 ーそう(伝聞)		No.28 てみる

について、特に検討が必要であろう。

識別度が高い・正答率が低い：問1(正答率平均40.7%)・問20(27.4%)・問31(26.2%)

識別度が低い・正答率が高い：問10(識別度0.3)・問18(識別度0.27)

表10は、上記の識別度の基になった初級文型テストにおける上位得点者群と下位得点者群の正答率と3種(X・Y・Z)の識別度である。識別度「X」は、初級文型テストにおける上位得点者群と下位得点者群との識別度(上記の図1)、識別度「Y」はP Tの文法テスト総得点順の上位得点者群と下位得点者群との識別度、識別度「Z」はP T文法初級・中級前半テスト得点順の上位得点者群と下位得点者群との識別度である。この識別度を視覚的に表したものが図2である。Xが細線、Yが太線、Zが点線で示される。

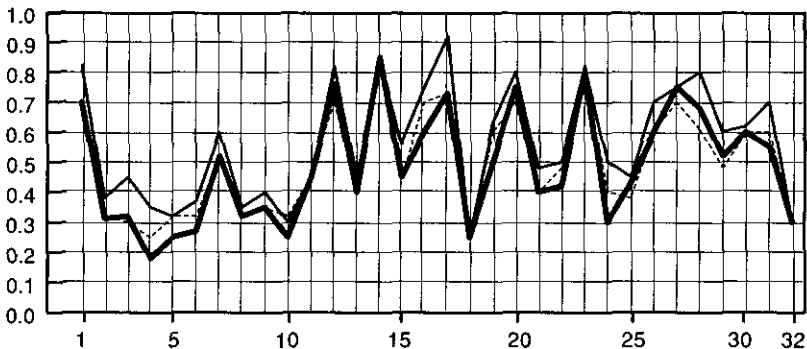


図2 識別度比較

表10

[初級文型正答率]

[識別度]

問 題 文	上位(%)	下位(%)	X	Y	Z
No.1 ーてから	90.0	7.5	0.82	0.70	0.67
No.2 ーている	100	62.5	0.37	0.32	0.32
No.3 ーてください	100	55.0	0.45	0.32	0.30
No.4 dic.ことがある	100	65.0	0.35	0.17	0.25
No.5 あまり～ない	85.0	52.5	0.32	0.25	0.32
No.6 ーたい	100	62.5	0.37	0.27	0.32
No.7 ーながら	100	40.0	0.60	0.52	0.52
No.8 ーたり	100	65.0	0.35	0.32	0.32
No.9 ーたり	100	60.0	0.40	0.35	0.35
No.10 ーことができる	95.0	65.0	0.30	0.25	0.32
No.11 ーまえに	97.5	50.0	0.47	0.47	0.47
No.12 ーておく	97.5	15.0	0.82	0.77	0.72
NO.13 ーた/dic.ほうがいい	100	55.0	0.45	0.40	0.40
NO.14 可能形	97.5	10.0	0.87	0.85	0.87
No.15 ーことにする	100	45.0	0.55	0.42	0.45
No.16 ーたことがある	97.5	20.0	0.77	0.62	0.70
No.17 ー(ば)ならない	97.5	5.0	0.92	0.75	0.75
No.18 ーとき	97.5)	70.0	0.27	0.27	0.30
No.19 おーになる	97.5	35.0	0.62	0.50	0.60
No.20 ーうとする	80.0	0	0.80	0.75	0.70
No.21 ーば	100	52.5	0.47	0.40	0.40
No.22 もう～ましたか	90.0	40.0	0.50	0.42	0.47
No.23 ーてしまう	100	17.5	0.82	0.82	0.80
No.24 ーそう(伝聞)	82.5	32.5	0.50	0.30	0.40
No.25 ーてくださる	97.5	52.5	0.45	0.42	0.37
No.26 ーてみる	97.5	27.5	0.70	0.57	0.57
No.27 ～に～を(使役)ために	82.5	5.0	0.77	0.77	0.70
No.28 ーてみる(ように)	100	20.0	0.80	0.67	0.62
No.29 まだ～ない	72.5	12.5	0.60	0.52	0.47
No.30 ーと	100	37.5	0.62	0.60	0.60
No.31 受身	70.0	0	0.70	0.55	0.60
No.32 受身	32.5)	0	0.32	0.30	0.35

図2でわかるように、当然、識別度Xがほとんど上位にあるが、識別度X・Y・Zが完全に一致する項目は少ない。また、識別度Yが識別度Xを上まわっている項目はない。識別度Zは、2項目で識別度Xを上まわる。以下の通りである。

識別度X(細線)が識別度Yと一致した項目：

11 ーまえに 18 ーときに 23 ーてしまう 27 使役

識別度XがZと一致、またはZの方が高い項目：(*はZのほうが高いことをしめす。)

5 あまりーない 10*ーことができる 11 ーまえに 14 可能形 18*ーとき 32 受身

3種の識別度の差異は、テストのタイプによって正答率の異なる学習者がいることから生じている。初級はほぼ完全に学習ができており、「初級文型テスト」においては比較的正答率が高くても、これから中級を学ぼうとする学習者は「P T文法テスト中級後半・上級」においては得点が低くなるのは当然である。つまり中級後半・上級レベルのテスト結果が含まれるP T文法テスト総得点に対応した下位得点群には、「初級文型テスト」で20～26点(62～81%)得点できている学習者が8人含まれ、結果として識別度Yを下げている。また「P T文法テスト初級・中級前半」は初級文型テストとの相関が高い(0.84)が、それでも「P T文法テスト初級・中級レベル」下位得点群には初級文型テスト20～24点(62～75%)の得点者が7人含まれ、識別度Zを下げる役割をしている。P T文法テストに対応した上位得点群に、初級文型テストにおける低得点者が紛れこむという逆の現象は少なく、わずかに2例(初級文型テスト19点、23点)が含まれるのみであった。

5. 今後の課題

以上、限定された条件であれば、識別度の点では、P Tのうちのある部分としての機能を果たせる可能性はありそうであるが、むしろ、中級へのレディネスを測るテストとして使用できるであろう。また、今回の文型テストに使用した会話文は語彙を限定し、非常に単純化したものであるが、そこに書かれた学習者の記入内容には、予想以上に習得過程が表われていた。正答率が75%以上の学習者個人については、語彙・文型を初級項目に制限したテストで総合的な日本語能力を測ることは無理であるが、学習者集団としては習得の傾向を具体的に得ることができた。

問題文については、識別度に表われた以外にも改良しなければならない点があり、今後への課題が残されている。上位得点群Aで得点が多少下がり、かつ下位得点群Dではある程度得点されている項目についてもさらに分析が必要である。統一話題として設定した「新聞・よむ」を他の言葉に変えた場合、測定結果にどのような変化が生じるかということも今後の課題として考えていきたい。

注

- (1) 教師用日本語教育ハンドブック「文章表現」(池尾スミ)の練習例(p.115)を参考にし、作成した。
- (2) 詳しくは、研究代表者酒井たか子(1995)「プレースメントの開発とデータ解析」(筑波大学学内プロジェクト)に説明がある。

参考文献

1. 池尾スミ (1979) 「文章表現」『教師用日本語教育ハンドブック①』国際交流基金
2. 石田敏子 (1986) 「英語・中国語・韓国語圏別日本語学力の分析」『日本語教育』58:162-194
3. 坂本 正 (1993) 「英語話者における『て形』形成規則の習得について」『日本語教育』80:125-135
4. 小宮・久野・村岡・柳沢 (1986) 「外国語習得適性テスト」『日本語教育』58:146-161
5. 市川保子 (1992) 「外国人日本語学習者の予測能力と文法知識」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』8:1-18
6. 稲葉みどり (1991) 「日本語条件文の意味領域と中間言語構造—英語話者の第二言語習得過程を中心に—」『日本語教育』75:87-99
7. 鎌田 修 (1993~1994) 「日本語教育における中間文法」『言語』大修館書店
8. 小谷津孝明編 (1988) 「記憶と知識」『認知心理学講座』東京大学出版会
9. 酒井たか子 (1995) 『プレースメントテストの開発とデータ解析』筑波大学学内プロジェクト助成研究
10. 日本語教育学会認定委員会編 (1991) 『日本語テストハンドブック』大修館書店
11. フォード丹羽・小林・山元 (1995) 「日本語能力簡易テストは何を測定しているか」『日本語教育』86:93-102

文法問題2

問題 「よむ」を適当な形にして、会話の（ ）に書きなさい。

例) 毎朝、わたしは新聞を（ よみ ）ます。

1. A 「いつも電車の中で新聞をよみますか。」
B 「いいえ。わたしは新聞を (①) から、うちを出るんです。」
2. A 「山田さん、いらっしゃいますか。」
B 「山田さんなら、今あそこで新聞を (②) いますよ。」
3. A 「英語の新聞でもいいですか。」
B 「いいえ、日本語の新聞を (③) ください。」
4. A 「いつも日本語の新聞をよみますか。」
B 「ええ。でも、ときどき英語の新聞を (④) ことがあります。」
5. A 「日本では英語の新聞は高いから、このごろはあまり (⑤) 。」
B 「わたしもおなじです。英語の新聞が (⑥) たいですね。」
6. A 「いつ新聞をよみますか。」
B 「朝です。新聞を (⑦) ながら、朝ごはんを食べるんです。」
7. A 「いつも何語の新聞をよみますか。」
B 「英語の新聞を (⑧) だり、日本語の新聞を (⑨) だりしますね。」
8. A 「わたしは漢字がわかりませんから、日本の新聞やざっしを (⑩) できません。」
B 「外国人のためのざっしもありますよ。」
9. A 「新聞はむずかしいのに、よくわかりますね。」
B 「日本語で (⑪) まえに、英語の新聞を (⑫) おきますからわかります。」
10. A 「ニュースは、いつもラジオの英語ニュースを聞いています。」
B 「そうですか。でも、日本語の新聞も (⑬) ほうがいいですよ。あなたは漢字がわかるから、日本語の新聞が (⑭) と思いますよ。」
A 「じゃ、来週から (⑮) ことにします。」
11. A 「日本語の新聞をよむのは、はじめてですか。」
B 「いいえ。国にいたとき、(⑯) ことがあります。」

12. A 「それは政治のニュースですね。日本語でよむんですか。」
B 「ええ。日本語の宿題で、あしたまでに (17) ならないんです。」
A 「そうですか。それ、漢字の辞書ですか。」
B 「ええ。新聞を (18) ときは、辞書がないと困りますから。」
13. A 「それは、きょうの新聞ですか。」
B 「ええ。(19) (お) になりますか。」
14. A 「じしんのニュースをよみましたか。」
B 「今、ちょうど (20)) としたところなんです。たいへんらしいですね。」
15. A 「じしんで、何人ぐらい死にましたか。」
B 「さあ.....新聞を (21)) ば、わかると思いますけど。」
16. A 「この新聞は、もう (22)) か。」
B 「ええ。もう (23)) しまいましたから、あげますよ。」
17. A 「キムさんは、日本のニュースをよく知っていますね。」
B 「ええ。キムさんは、毎日、日本の新聞を (24)) そうですよ。」
18. A 「日本のニュースについて、よく知っていますね。」
B 「わたしのクラスでは、毎朝、先生が新聞を (25)) くださるんです。」
19. A 「この新聞はむずかしいと思いますけど、わかるかどうか (26)) みます。」
B 「わからないところは聞いてください。」
20. A 「毎日、英語の新聞を買いますか。」
B 「いえ、ときどきです。英語を教えているので、高校生に英語の新聞を (27)) ために買うんです。」
21. A 「先生が、日本の新聞を (28)) みるようにとおっしゃいましたね。」
B 「そうですね。でも、わたしは、まだ (29)) 。」
22. A 「電車の中で新聞をよみますか。」
B 「いいえ。電車の中で新聞を (30)) と、となりの人に (31)) から、いやなんです。」
23. A 「会社員は、たいてい日本経済新聞をよみますね。」
B 「そうですね。でも、朝日新聞や毎日新聞のほうがたくさんの人に (32)) と
思いますよ。」

資料2：誤用 [動詞右の数字：記入数、無し：記入なし、他：「よむ」以外の単語使用]

〈正答率が高い項目〉	A	B	C	D
2[-ている]			よんで/よつで よむひとと	よんで4/よつて/よみでは よむ/よみ/よみたい よまかった/無し2/他3
3[-てください]		よまないで	よまれて 他6	よんで4/よむつて/よみ よむんで/他9
4[-ことがある]			よんた/よっている 他1	読み4/よみに/よみました 他4
6[-たい]			よめ/よむ 他1	よぬ/よん/よむ/よく よみたい1/よまくなかった 無し4/他4
7[ながら]		よむ	よむ 3 よんで	よむ12/よま2/よめ よん(で)3/よみで よむかった/よみる/他1
8/9[-たり]	0/よみ	よみ2 よんだ		よみ7/9 よむ1/1 よんで 1/ よん /1 よむん 1/1 よめ1/1 よみます1/ よみく1/1 無し /1 他 /1
10[ことができる]	よめる よんだ		よめる2	よめる/よみ3/よみたい よんだ/よむんで 無し4/他1
11[-まえに]	よんだ	よみ	よんだ よみ	よんだ2/よんで/よ 無し6/他9
13[-ほうがいい]		よんで	よむの2 他1	よんた2/よみ/よみの 無し6/他7
15[-ことにする]			無し2/他1	よみ2/よめ/よんだ 無し9/他6
18[-とき]				よみ2/よんだ/よんで よむんで/無し7
21[-ば]		よ/読/よべ よまれ	よまれ2/よめれ	よみ 3/よむ/よまかった よまれ2/よめれ/よまない よむの/よむり/よんられ 無し6/他1
25[-くださる]	よませられて	よませで1/よまれて よませせて	よま/よみ よまれて3	よんで3/よん/よむつて 無し10/他3
〈正答率が低い項目〉				
20 意向形	よむ6	よむ 22 よんでいる 3 よんた/だ 5 よみ よむよう	よむ 17 よんでいる 2 よんた/だ 3 よみ 5 よみない/無し/他1	よむ 10 よんた(だ)2/よんで2 よみ2/よみました よまない/よむつて 無し11/他1
27 使役	よむ5	よむ 23 よめる2/よませせる よむの/よんでくれる	よむ 19 よめる2/よませせる よむの2/よんでくれる 他1	よむ 9/よむの/よま よませせて/よめさせる よんで/よんた/よみの 無し11/他4
31 受身	よむ/よめる よませる 4 よまされる よませられる よまられる よまれた 他2	よまない/よませます よませる6/よませせて よまれさせる よませられた よまられる/よまれた よんだ2/よんでいる よみます5/よめます よまれでしまった/他6	よむ4/よみ/よまない よませる/よませます よまれて よめない/よんでない よめる よんだ/よんでいる よみます3/よみません 無し3/他8	よむ5/よみ/よみです よんでいる よみたいです2 無し15/他6

32 受身	よまれる よませる よませている よませるんだ よまされている よませていた.. よめる2 よもう	よまれる2 よませる 3 よむ6/よもう2 よんでいる3 よまされている よむん/よむだろう	よまれる/よまされる よませる/よまさせる よむ3/よめる/よもう3 よんでいる2/よんだ2 よんだらう/よまめる よめるようになった よまれ/無し2	よまされる/よませている よめさせる よむ8/よんだ よみます よんだらう 無し16/他1
-------	------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------

《正答率の差が大きい項目》

1[-てから]	よんだ4	よんだ 12 よみません6 よまない 1 よむ/よんで	よんだ13/よんだ よみません3/よめません よまない2/よまなくて よまなかった よむ/よった/よみた よみます2	よんだ/よみます よみません6 よまない5/よめな よむ4/よみ2 よみました2/よみました よみではありません 無し3/他2
12[-ておく]	よん1	よみ 無し	よみ5/よむ3/よんだ2 無し3	よみ6/よむ5/よんだ2 よみます1/無し14
14 可能形	よもう1	よもう 3 よむ 2 よまれる1	よもう3/よむ8/よんだ よみやすい/よもう よもう/無し2/他3	よむ9/よんで3/よんだら よめます/よみません よもう/無し5/他5
16 過去の経験	よむ1	よむ6	よむ 10 よんだ 2	よむ14/よんだ3/よんみ よまなかった/無し7/他1
17[-ならない]		よまない(と)2 よめれば/よま3 よみ2/よんで よめなければ	よまないと/よまれれば よま12/よまなっけ よみ 3/よまなく2 よめ/読む/無し2	よま4/よまあ よみ3/ よむ5 無し11/他6
19[お-になる]		よめ1 よむ2	よめ2/よむ(こと)4 よも /無し1/他2	よむ4 無し10/他6
23[-てしまう]		よみ3 無し1	よみ3/よんで/よみま よんだ6/無し1	よみ7/よむ4/よむのを2 よんで3/よま/よみを よみでは/よみました 無し6/他3
26[-てみる]	よませられて	よませられて よ	よ5 無し1	よ7/よんで5/よむのを よむところ/無し9/他2
28[-てみる]		よまれて3/よ よませて よんでやって	よ/よめ/よめて よませ 無し3/他2	よ6/よませて よみ/よんで3/よく 無し16
30[-と]		よまない 2	よみません2/よまない よんだ 2/他1	よみません1/よまない2 よんで2/よんたい よみ/よみます/よむどき よむくな/よみくであり 無し11/他1

《正答率の差が少なめの項目》

5[あまり~せん]	よまない2 よめなかったんです よまなかった よまなかった よまなさそうです	よまない5 よまないです2 よんでいない よめなかったんです よまなかったんです3	よまない2 よまないです3 よんでいない/よめない よみたいです 他2	よまない4 よまないです5 よめない/よむない 無し3/他9
22[もう-た]	よみました1 よんだ 2 よみます 1	よみました1 よんだ 4 よもう よんでいます	よみました1 よんだ2/よんでいます よみます8/よめます よまれます/無し1	およみました/よみです よんだ1/よみ/よむ よみます5/よみません 無し5/他3
24 伝聞	よみ 4 よんだ 1 よもう 1	よみ 13 よんだ 2	よみ 10/よもう よんだ 4/よみま よもう/よみま	よみ7/よんで/よんでいる よんです 無し8/他3